説教20221016創世記32：2-8，22-31ルカ18：1-8「裁きの座」

　聖書はどう読んでも裁きの話に満ちていまして、裁きということは聖書の中心主題の一つであります。そして、主イエスに裁かれるということは、私たちが深く主イエスを信仰することによって、究極的には、主イエスによって救われるということに一致します。このことはヨハネ福音書に言い表されていまして、ヨハネ福音書3章 17節で、

神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。

と言っておきながら、9章 39節では、

「わたしがこの世に来たのは、裁くためである。こうして、見えない者は見えるようになり、見える者は見えないようになる。」

という様に、一見相矛盾することをイエス様が言われているのは、私たちが主イエスの信仰によって救われることが、主イエスによって裁かれることと同じであることを示唆しているのでしょう。

又、私たちは使徒信条によって、主イエスは、かしこよりきたりて生ける人と死ねる人をさばきたまわん、と信仰を告白しておりますが、この信仰告白は、本来、私が喜んで主イエスの裁きの座に立たされるということの告白なのです。

主イエスは、最後の日に、全ての人間を裁かれます。先週の11日に、市川當喜枝姉が天に召されました。彼女は、この世での信仰の戦いに勝利して、今や、慈しみ深いイエス様の御手の内に守られておられます。そして最後の日の裁きの座に立ち、そこで、イエス様から完全無罪の判決を受けて、完全に罪赦されることを心待ちにしておられることでしょう。

全ての人間は、命を与え又奪いもする主によって裁かれますが、主イエスに信頼して、全き裁き主である主に喜んで近づく者は、主に近づくことによって救われます。もちろん裁き主に近づくということは、大変畏れ多い喜びではありますが、同時に、主に近づく者は死からも悲しみからも救われるのです。

裁きの座に立つということが喜びである、ということは、出来るだけ裁判などしないで、日々を安全安心にやり過ごそうとする習慣が身についている現代ではより分かりずらいことかもしれません。しかし、江戸時代の時代劇をたとえに出してみますと、裁きの座に立たされることの有難味がよく分かります。江戸時代の庶民は社会的にも経済的にも服従させられて、支配者たちからどんな理不尽なことをされても、裁きを受けることも出来ず、ただ泣き寝入りさせられて、悪は闇へと葬り去られました。そんな時代には、遠山の金さんや水戸黄門といった裁き主の前に、顔と顔とを合わせて立つことができる、ということだけでも、庶民にとっては、計り知れない喜びであったのではないでしょうか。

そして現代という時代も、なんだか不可解で理不尽な事件が増えておりますので、私たちはこの地上で暮らすうえでも、裁きの座にたてるという裁判の積極的な意義をこれから問い直していくのがよいかもしれません。

今日のルカ福音書に出て来ます、このやもめも、社会的に弱い立場の人々をたとえています。このやもめは、何とか裁判をうけたいのです。

彼女が語った「相手を裁いて、私を守って下さい」という言葉には、ちょっと日本語の意訳が混じっていまして、原文のギリシャ語には「私を守って」という意味合いはありません。もう少し原文に忠実に訳すならば「主よ、私を正しくさばいて、相手を斥けて下さい」となります。こっちのほうが腑に落ちるのは、皆さん法廷の場を想像して頂ければわかりますが、裁判官の前に原告と被告とは等しく並んで、どちらも裁かれるわけですから、このやもめも又裁かれるのです。その結果、事実と正義に照らして、どちらかに無罪が言い渡されるのです。ですから「相手を裁いて、私を守って下さい」という言葉遣いですと、なんだか一方的で、このやもめの品位を下げているように感じ取られます。

18章 7節で、「まして神は、昼も夜も叫び求めている選ばれた人たちのために裁きを行わずに、彼らをいつまでもほうっておかれることがあろうか」とイエス様は言われていますが、ここでイエス様は、昼も夜も裁き主を呼び求めて、裁き主にすがりついたこのやもめが裁かれた、ということを確かに言い含めています。

今日の講読詩編も、私が主に裁かれるということが主題になっています。詩編２６編【ダビデの詩。】主よ、あなたの裁きを望みます。

と、始まりますが、これももっと元のヘブライ語に忠実に訳せば、

ダビデの詩。主よ、私を裁いてください。

となりまして、こちらのほうは、新しい聖書訳でそのように訳し直されています。

主よ、私を裁いて下さい、とダビデは率直に言いながら、おそれをもって主に近づき、「主よ、わたしを調べ、試み／はらわたと心を火をもって試してください。」と言って自らを厳しく顧みています。

そして、「主よ、わたしは手を洗って潔白を示し／あなたの祭壇を廻り

感謝の歌声を響かせ／驚くべき御業をことごとく語り伝えます。

という様に、ダビデは主に近づいて、主に礼拝し感謝をささげるのです。この様に主に近づくダビデを、主は憐れみを以って受け入れ、たとえ、ダビデの身に罪があったとしても、その罪を主は赦して下さり、彼を罪なき者へ変えて下さるのです。この様に、主イエスは心から感謝と賛美を以って、自分に近づいてくる者を、この世の因果関係を超えたところで、大いなる憐れみを以って、無罪として下さるのです。

今まで、私が主イエスに裁かれることの恵みを力説してきましたが、その恵みは私の口などでは語りつくせない大いなる主イエスからの恵みであります。

今日の創世記のヤコブ物語では、ヤコブが主なる神と格闘し、そして「もう去らせてくれ。夜が明けてしまうから」という主なる神に「いいえ、祝福してくださるまでは離しません」と言って、ひたすらすがりつくヤコブの姿が記されています。この出来事は、ヤコブが、エサウとの恐るべき再会が果たされる前に起こった出来事です。この時のヤコブも主の裁きの座に立たされたのです。裁きの座というのは、仮借ない戦いの場でもあります。ヤコブはこの時将に、裁き主である神と真剣勝負の格闘をしたのです。ヤコブのももの関節は外され、最早、体力的には闘う術はなかったでしょう。しかし、それでも彼は主なる神にすがり続けたのです。このしつこさは、先ほどのやもめやダビデ達と共通する、主に対する姿勢であり、私たちも見習うべき主イエスに対する姿勢であります。そのしつこく祝福を求めるヤコブに対し、主は勝利を恵んで下さり、「お前の名はもうヤコブではなく、これからはイスラエルと呼ばれる。お前は神と人と闘って勝ったからだ。」と言われて、ヤコブを祝福されたのでした。この勝利と祝福によって、ヤコブは一個人から、イスラエルという神の民全体を言い表す名前に変えられました。このことは、私たちが主イエスによって救われる道筋を示すことであるでしょう。この私は、初めは、イエス様の前に一人立たされ、顔と顔を合わせて、裁きの座に立たされます。そして、私はイエス様から罪赦され、新しい命を与えられます。そしてこのことは、主イエスを信じ主イエスに近づく全ての人々に等しく恵まれる主イエスによる罪の赦しです。この様にイエス様によって同じ体験をさせられる私たちであるがゆえに、私たちはクリスチャンと呼ばれるのです。

このヤコブとエサウの物語を読んでいますと、私たち人間が、誰によって裁かれ罪赦されるのかということがよく分かります。ヤコブは、かつて兄のエサウに対し、主なる神の祝福を奪い取るという酷い仕打ちをして、エサウの怒りを買ってしまいました。それからこの兄弟は何年も会わないまま離れて暮らしましたが、ヤコブの中にあったエサウに対する罪悪感は残り続けました。そしてヤコブは、エサウに再会する前に、いわば独り相撲を取って、エサウを大いに恐れたのでした。ヤコブは、エサウの処へ先に行った使いの者の「兄上のエサウさまのところへ行って参りました。兄上様の方でも、あなたを迎えるため、四百人のお供を連れてこちらへおいでになる途中でございます」という報告にさえ、非常な恐れを抱いてしまうのです。ヤコブは、400人のお供という言葉を、抱いている罪悪感ゆえに、400人の戦士という言葉に、自動的に置き換えて解釈してしまったのでしょう。この言葉の取り違えというのは、些細な事であっても、大きな状況判断の誤りを導いてしまう、重大事だと言えるでしょう。又、いざエサウとの再会を果たしてみれば、エサウには最早、ヤコブに対する怒りなど消え失せ、エサウは走って来てヤコブを迎え、抱き締め、首を抱えて口づけし、共に泣いたのでした。

もし、ヤコブがこの再会に至る前に、主なる神と格闘し祝福を受けるという出来事がなかったとしたらどうでしょうか。ヤコブは、こんなにエサウが再会を喜んでくれたのは、自分が先付けした贈り物が功を奏したのだと、買いかぶったかもしれません。或いは、ヤコブが最早、昔の怒りを失った姿を見て、しめしめと思って胸をなでおろしたかもしれません。いずれにしましても、その程度の人間的な喜びでは、たかが知れていますし、その喜びもやがて失われてしまうということは想像に難くありません。

ヤコブとエサウが、主の祝福を分かち合う、まことの喜びの再会を果たすことが出来たのは、ヤコブが、その前に主なる神に裁かれ罪悪感から解放され、祝福を勝ち取っていたからに他なりません。この主なる神との顔と顔を合わせた一対一の真剣勝負を経て、ヤコブは、エサウと主の祝福を分かち合う人、イスラエルへと変えられたのでした。ヤコブとエサウが憎み合ったのは、かつて主の祝福を奪い合ったからでしたから、それを替えることが出来るのも、又、主の御業であり、主の祝福によるのです。

さて、今日は、私たち一人一人が、主イエスから裁かれることから始まる主イエスの計り知れない恵みつついて、語りなおしましたが、ルカ福音書 18章 8節に大変、意味深長なイエス様の御言葉が記されています。

「言っておくが、神は速やかに裁いてくださる。しかし、人の子が来るとき、果たして地上に信仰を見いだすだろうか。」

イエス様は、現代の地上の様子を目の当たりにして、この様に言い当てておられるようです。今の私たちは、主イエスの恵みの心地よさばかりに目を向け、主イエスに自ら近づいて、その裁きを仰ぐということに躊躇しがちであります。しかし、今日のヤコブの姿に見てきましたように、エサウとの再会という出来事の前に、ヤコブが自ら主に近づき裁かれて、勝利と祝福を恵まれたという、一つの主にある試練と葛藤の場面がなければ、そのエサウとの再会の喜びも、薄っぺらくはかないものであらざるを得なかったでしょう。

主イエスが肉体を以ってこの地の来て下さったのは、自らの肉体に釘打たれて、その血潮によって全ての人々を究極的に救おうとされたからです。私たちは主イエスの受けた苦しみを覚えつつ、その先にある永遠の喜びを勝ち取るために、主イエスの裁きの座に大胆に進み出て、救い主イエス様に感謝と賛美を捧げて参りたいと願います。

お祈りします

天の父よ

主よ、あなたは計り知れない憐みと慈しみを以って、私たちのところへ、救いの御子イエスキリストをつかわして下さいました。御子はこの地上で不正な裁きをお受けになられ、そのために血を流されました。そして其の血によって私たちが救われた幸いを覚え、あなたに感謝と賛美を捧げます。どうか私たちがこのことを最後まで信じ、最後の裁きのときに臨むことが出来ますよう、私たちの日々を守り祝福してください。

１１日に召天された當喜枝姉もまた、私たちに先立って、この世の戦いを終え、今は主イエスの憐れみと慈しみの御手の内にあることを信じます。どうか私たちが主イエスにあって同じ思いとなって、最後のときの永遠の喜びを目指して、主イエスの道を歩んで行くことが出来ますよう、私たちに信仰を恵み、その信仰を深めて下さい。